

〔第25回 学術集会シンポジウムII〕

## 家族看護実践の深化と発展の多様性

高知県立大学看護学部教授

(座長) 中野 綾美

高知大学医学部附属病院家族支援専門看護師

星川 理恵

### 1. 趣旨

家族看護実践の深化とさらなる発展の可能性、家族看護実践の将来をデザインすることを目的とした。

### 2. シンポジストからの報告

#### 1) 家族形成期における家族の意思決定を支えて

中込さと子氏(山梨大学大学院総合研究部教授)は、遺伝医療を紹介し、熟慮した意思決定支援として遺伝カウンセリングが重要であること、全ての医療分野に“遺伝/ゲノム情報は応用されており、特性(不変性・予見性・血縁者との共有性)を踏まえて、不変だからこそ〈いのちの多様性と尊厳を護る〉、予見性があるからこそ〈遺伝/ゲノム情報を役立てる〉、血縁者との共有性があるからこそ〈家族や関係者と共に取り組む〉ことについて報告した。

#### 2) 予期せぬ家族成員の生命危機期に揺れる家族を支えて—代理意思決定支援のありかた—

松本修一氏(滋賀県立総合病院家族支援専門看護師・集中ケア認定看護師)は、クリティカル領域での意思決定の理想と現実の乖離、さらに代理意思決定支援のあり方について、家族支援を根付かせることを目指して実践をリフレクションするためのケースカンファレンス(140件/年)の成果を報告した。

#### 3) 障がいと共に生きる家族を支えて—精神障がいの

親と暮らす子どもへの支援からみえてきたこと—

土田幸子氏(鈴鹿医療科学大学看護学部准教授)は、『親&子どものサポートを考える会』を立ち上げた看護実践から、精神障がいの親と暮らす子どもの状況と思いについて報告した。親支援・子ども支

援が両輪のように機能してはじめて安定した支援になること、“家族”として包括的に捉え、親子が支援を求めやすい環境づくりの重要性を報告した。

#### 4) 家族で迎えるいのちの仕舞いを支えて

小笠原望氏(医療法人関の会大野内科院長)は、四万十川の大自然の映像をバックに、高齢化の進む地域での「いい仕舞い」—ある程度の年齢まで生きて、直前まで食べて、痛まず、家族の中で最期を迎えることを意味する—を紹介した。いのちの自然を大切にし、生活が続く中に患者さんの最期があること、その舞台のプロデューサーとして、現場に必ず足を運び、家族で迎えるいのちの仕舞いを支えていることを報告した。

### 3. 討議

家族の中の生死に関わる専門職者の支援のあり方について討議した。次に、発症者の人格変化を伴う遺伝性神経難病の家族への関わりから、最初から家族全体を捉えて家族歴・家系図を描いていく関わりが、早期からの危機予防的介入として非常に重要になることを確認した。フロアから、家族の強いこだわりの療養法から褥瘡形成に至った事例が紹介され、家族への効果的な支援方法について討議した。

### 4. 総括

家族を俯瞰的に捉えて支援すること、『主体は誰か』を意識化して対応することが重要であり、他分野との協働により家族看護実践はさらに深化・発展を遂げることが示唆された。